

北海道教育委員会会議審議概要（令和5年第14回）

1 公開案件の審議

(1) 報告1 「全道地学協働活動研究大会」について

ア 説明員 伊藤社会教育課長

イ 結論 報告を了承

ウ 審議内容

【伊藤社会教育課長】

令和3年度（2021年度）から、道教委では、コミュニティ・スクールや地域学校協働活動を「地学協働」と称して推進しており、その取組の一つとして、高校生と大人と一緒に地域課題を解決する地域課題探究の学習体験を通して、地域の未来を担う人材の育成を目指す「北海道CLASSプロジェクト」を進めているところです。本プロジェクトは、今年度が最終年に当たることから、成果を広く全道で共有するため、資料の2ページにあるとおり、本年11月16日に「全道地学協働活動研究大会」を開催し、研究指定校8校の実践発表をはじめ、地域と学校の協働体制づくりや活動の活性化等における実際の現場での課題や工夫について、学校の管理職やコーディネーターによるトークセッションを行います。

3ページから4ページまでの「資料2」は、昨年度、実施した「地学協働活動推進フォーラム」の様子です。フォーラムの参加者からは、「生徒にとっても、大人にとっても、地域で地域を学ぶだけでなく、キャリア教育としての価値も感じた。」、「地域との連携に関して、「社会教育」に相談してもいいんだと知った。」などの感想が寄せられ、プロジェクトの成果の共有と関係者の学びの場となりました。一方、本プロジェクトを推進する中で生徒からは、「将来を具体的に考えることができたので、実現に向けて勉強を頑張りたい。」という感想や「まちの力になれたことが嬉しかった。」といった感想を得ており、地域の方からは、「まちに活気が出た。」という感想や「自分たちも勉強になり、高校生と関わることができてうれしい。」といった応援の声のほか、地域の企業が

らは、「地元高校ともっと関わりを持ちたい。」という御意見や「地元の卒業生を採用したい。」といった御意見を頂くなど、地域と学校の関わりを深め、地域をフィールドにした学習活動の拡充は、生徒の学習意欲の向上のほか、地元への愛着の高まりや地域と学校の相互理解につながっています。今後は、高校における地学協働体制の構築について、プロセスや成果と課題をとりまとめ、プロジェクトの報告書を作成し、全道に発信していきます。

説明は以上です。

**【倉本教育長】**

御質問や御意見はありませんか。

**【川端委員】**

いろいろな学校で取組をされていて、非常に素晴らしいと思います。3年目になりますので、今後、どのように進んでいくのかというところに注目をしたいです。4ページの下の方に「CLASSプロジェクトのような支援が小学校や中学校にもあれば」という意見があります。自分の住んでいる町を知ることは、自分の過去を振り返っていくことになると思います。道立高校がある地域ばかりではないので、今後の課題として、小・中学校との連携に取り組んでいただけたらと思っています。

**【伊藤社会教育課長】**

プロジェクトの成果の普及や、新たな事業検討の参考にしたいと思います。

**【大鐘委員】**

地学協働の取組は、地域の子供と大人が一緒になって、その地域の具体的な課題を解決していくという新しい学びの形であり、学校教育を大きく変えていくものではないかと私は大変高く評価したいと思います。説明の中であったように、地域の子供たち、住民の方、企業の方、行政の方それぞれに成果が確認できているところが素晴らしいと思います。この北海道CLASSプロジェクトも今年が最終年で、最終的に報告書を作って発信されるということですが、ぜひ積極的に広げて継承していただけるよう進めていただきたいと思います。

資料にあります2月のフォーラムに参加しました。地学協働というややもすると、郡部の小さな高校が、その地域と一緒にってというように思われますが、帯広三条高校のような都市部の高校も参加していましたし、都市部でも、具体的な課題を発見するフィールドというのは、確かに見いだせるということを感じました。

また、普通科の高校だけではなく、商業高校、工業高校、水産高校などの専門高校の方が、課題研究という一歩リードした探究的な学びを昔から行っていますので、普通高校は、そこからも学ぶことができるのではないかと考えています。自分たちが根差しているところ、すなわち自分たちのアイデンティティを形成している地域というものを学ぶことによって、自分をきちんと捉えることができ、それによって自分の可能性や、自分に何ができるのか、どのような貢献を地域に対してできるのかといった、広い意味でのキャリア教育につながっていくのではないかと思います。

一方で、先ほどお話がありましたが、人口減少が進む中、地域においては、企業が地域の人材をどのように確保していくかという切実な問題も生じてきていることとしますので、今後、その辺りをどのように明確な形でデザインしていくかということも、この地学協働推進の一つの仕事ではないかと思います。

まずは、北海道CLASSプロジェクトの3年間の成果を全道的に広めて、実質化して行ってほしいというのが、私の願いです。

**【伊藤社会教育課長】**

一過性のもものならないよう、着実に進めていきたいとします。

**【大鐘委員】**

もう1点ですが、過去の愛着というのは、人間にとってものすごく強いもので、地域への愛着というのは人とのつながりだと思ひます。今、高校生の半数以上は進学しますので、地元を離れる可能性は当然あるわけですが、それぞれの子供の過去の中に人とのつながりを柱とした地域への愛着を作っておけば、進学した後、また地域に戻って貢献したいという意識は十分芽生える可能性があると思ひます。その辺りの仕組みも

作ることができるのではないかと思うので、よろしくをお願いします。

**【清水委員】**

地学協働は、どちらかというと、地方の方が関わりが強いという印象を持っていましたが、アンケートの結果、「キャリア教育としての価値も感じた。」という感想もあったということです。都市部でも少しずつ理解・浸透してきているのではないかと思います。地学協働にどのように関わるかということについては、地方、それから都市部、また、都市部においても、大学進学率の高い高校とそうではない高校、専門高校、普通科、それぞれの関わり合い方、熱意は違うと思いますが、地学協働というアプローチの仕方の有用性というのは、この3年間でそれなりに理解され、浸透してきたのではないかと思います。生涯的な教育という見方をしたとき、地学協働という考え方、アプローチの仕方は、今後、極めて重要なものとなってくると思いますので、今年度が最終年ということですが、継続的に取組が続いてほしいと思っています。

**【渡辺委員】**

4ページの「感想・気付き等」のようにまとめていただくことは非常に重要なことだと思います。内容を見ますと、分析して解決しなければいけない問題が羅列されていると感じました。

例えば、中段辺りに、「地域ごとに抱えているリソースが違うので、一律で同じような取組をする必要は全くない。」「地域との協働をすることが目的になると危険だと感じる。」「あくまで自分軸で生徒が考えて、突き詰めていくことが大切だ。」と言っている方がいます。こういう感想が出てくるということは、実際の活動の中で地域と協働することが目的になっていると感じさせる取組があったのではないかと想像しなければいけないと思います。しっかりと目的を示していくのは行政の役割だと思いますので、段階を踏んで示していけたら良いのではないかと思います。

**【大鐘委員】**

今回、社会教育課が所掌している地学協働の推進ということで報告していただきましたが、中身を見ると、学校教育の部分がとても大きい

で、学校や市町村教育委員会との連携が不可欠だと思います。高等学校でいうと探究の時間がありますし、探究の時間ではなくどの教科でも、横断的に学びを実質化していくという方向になっていますので、そういった意味では、社会教育課がどのように動くかということが非常に大きな意味を持ってくると思います。ぜひ、幅広く横断的に動いていただければと思います。

**【倉本教育長】**

ほかに御質問や御意見はありませんか。

《委員から質問・意見なし》

**【倉本教育長】**

それでは、以上で本件の審議を終わり、報告を了承します。